

学長室だより

2015.4.24 NO.6

新入生の皆さんへ

新入生の皆さん、国際教養大学へ入学お目出度う。

日本全国のみならず海外 20 カ国から 279 名の元気な皆さんが、秋田のこの地に集まり、今後 4 年間の学生生活を始めるのを見ることは、本学の学長として心嬉しい限りです。

学生生活の中で、親しい友人をつくり、共に勉学に励んでいくことは、一生涯の宝になります。また、教員との関係は、本学のように小規模で少人数教育を行なっている大学では特に緊密なものがあります。学長をはじめ教職員は、皆さんが充実した学生生活を送れるよう、万全の準備をして待っておりました。これから教職員と一緒に国際教養大学を盛り立てていきましょう。

学生諸君にとっては、大学生活は勿論初めての経験ではあるし、その中で、大学の教員とはどんな人間なのだろうと思われることでしょう。教員も普通の人間ですから、特別視する必要は全くありませんが、強いて言うならば、教員の仕事は二つあります。一つ目は自分の関心のある分野や事象を深く探求することです。これは基本的には教員個人の興味や使命感や必要に源を発しているのですから、多くは教員個人の問題になります。教員は、このためには徹夜もいとわず没頭する程です。それほどまでに熱中する対象をもっているということで、教員は、まず幸せな人達であると言えます。しかし、研究というのは、一朝一夕で成るものではありません。通常、その成果を得るには長い年月を要します。その途中では、辛いことや苦しい事が続きます。しかし、それも最終的には楽しみに変えてしまう能力の持ち主が教員です。ですから、そのような教員と一緒に居ると、実に面白い人間に出会えるというものです。教員は自分の研究や関心の事を目を輝かせて話してくれることでしょう。そのような教員に是非近づいて、話を聞いて下さい。

教員の二つ目の仕事（と言っても第一の仕事と同じに重要な）は勿論皆さんの教育です。それは基本的には種々の分野の知識や技術や考え方や理論体系等を皆さんに教えることですが、本学のような国際教養を学生に身につけさせることを大学のミッションとしている場合、一個の人間としての力—全人力を最重要視しています。「全人力教育」を英語で the whole person education と言いますが、これは、知性、徳性、感性を備えた人間に成ることを目的とする教育のことです。このような全人力教育をほどこし、諸君をグローバル化しつつある世界を舞台に活躍出来る人財に変貌させることが国際教養大学の教育です。本学は未だ若い大学で、これまでの卒業生は今年の 3 月に卒業して行った先輩達を含めても、1,100 名程しかおりません。この卒業生達は国際社会に出て活躍しております。彼等の大いなる活躍が実は本学の教育が正しかったことを証明することになります。その観点からすると、新入生を全

人力教育によって鍛えていくことは（言葉はつつしまなければなりません）諸君を実験台として本学の教育の正しさを証明する実験を行なうことであります。

私が大学生であった頃、幾人もの先生から深い影響を受けました。例えば、私が師事した板垣與一教授は、「学問とは常に広い心を持って、大海を泳ぐ如く、島かと思えば雲、雲かと思えば島、という悠揚迫らぬ心境で楽しむものだ」と言うのでした。つまり、学ぶことを楽しめということです。もう一人の恩師であった小島清教授は「学問とは激しい気迫で貫き通さなければならない道だ。論争相手を打ち負かす気概がなければならない」と言うのでした。アメリカに留学した時に師事したりチャード・ファーマー教授は、「研究テーマなどどこにでも、いくらでもある。要はそれに気が付かないだけだ」と言って、講義の中で次から次へとテーマを設定しては、そのテーマをどうして学問的に探究していくべきかを恐ろしい程の独創力で述べまくるのでした。

このように、教員の発した言葉は、時として学生の心の中に深く打ち込まれ、以後幾十年も影響を持ち続ける場合があります。しかし、これも、その言葉が発せられたその場に学生が居て、その言葉を心がつかむ態勢がその瞬間に存在しなければ、その言葉は永久に消え去ってしまうのです。その意味では教員と学生の関係は一瞬々々が意味をもつ場合があり、その場合にしか厳密な意味で師弟関係は存在しないと云えるでしょう。

学生諸君、どうか良き友人、教員にめぐり会ってください。



鈴木 典比古